

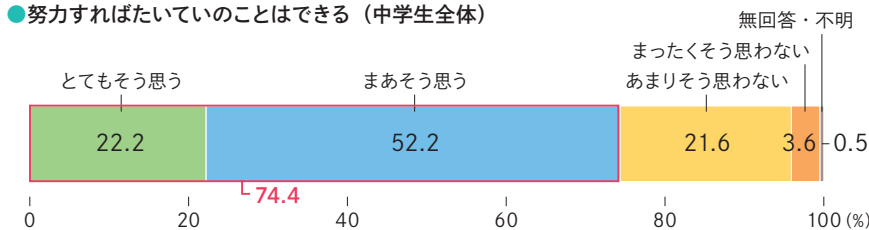
# 「努力を信じる心」を 育むために教員ができること

学力が同程度の子どもでも、努力の価値をどう捉えるかによって、学力の伸びに違いが出るのが明らかになっています。今回は、全国の中学生を複数年にわたって調査したデータを用いて、「努力を信じる心」の重要性と育成のヒントについて考えます。

## 1 「努力を信じる心」は、学年が上がるほど低下

図1 約7割の中学生が「努力すればたいのことはできる」と思う

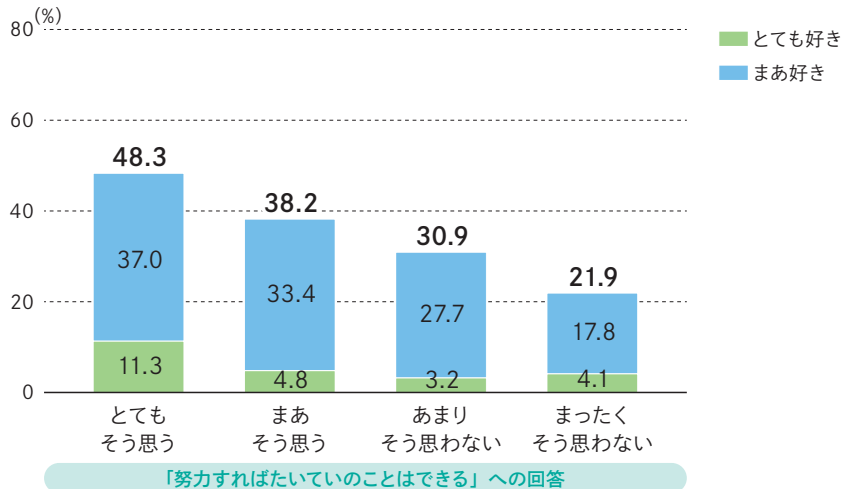
●努力すればたいのことはできる（中学生全体）



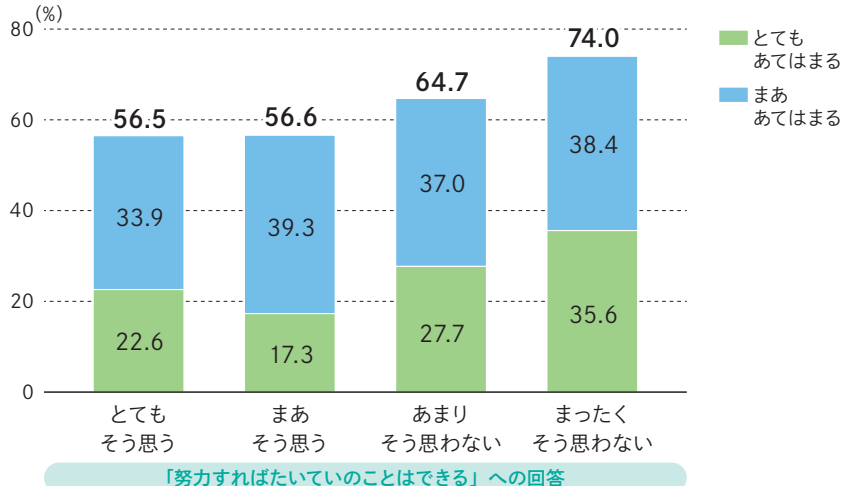
注) 公立中学校に通う生徒の回答。

図2 努力を信じる生徒ほど、学習に前向きになる

① 1年後の「勉強が好き」の比率 ※有意差あり



② 1年後の「勉強しようという気持ちがわかない」の比率 ※有意差あり



全国の公立中学生に、「努力すればたいのことはできる」と思うかどうかを尋ねたところ、約7割が「そう思う」（「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計）と回答した（図1）。

約7割という調査結果に対して、数が多いという印象を受けるかもしれないが、「とてもそう思う」と回答した生徒は、約2割にとどまる。また、学年別に「そう思う」比率を見ると、中1生（78.0%）>中2生（73.7%）>中3生（71.4%）と、高学年になるほど低くなる。さらに、中学生に比べて高校生の肯定率は低い（中学生全体：74.4% > 高校生全体：71.4%）。生徒の「努力を信じる心」は意識して育まないと、学年が上がるにつれて停滞していくものであるといえる。

努力を信じる生徒は、そうでない生徒に比べて、学びに向かう姿勢が異なるのだろうか。同じ生徒を複数年追跡し、その後「あなたは勉強がどれくらい好きですか」と尋ねたところ、「努力すればたいのことはできる」に対して肯定的に回答した生徒ほど、1年後に「勉強が好き」（「とても好き」と「まあ好き」の合計）と答えた比率が高かった（図2①）。一方で、学習に対する無力感を表す「勉強しようという気持ちがわかない」（「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の合計）と答えた比率は、「努力すればたいのことはできる」に対して否定的な生徒ほど高かった（図2②）。

以上の分析から、努力を信じる生徒ほど、その後の学びに対する関心や意欲が高い傾向にあることが分かる。それは、努力を信じる気持ちの醸成が、生徒の学びに対する意欲を引き出す可能性を示唆している。

## 出典 「子どもの生活と学びに関する親子調査 2016-2018」

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が共同で立ち上げた「子どもの生活と学び」研究プロジェクトによる調査。2015年から毎年、小学1年生から高校3年生までの親子約2万組に調査し、子どもの成長のプロセスとそれに影響を与える要因を明らかにしている。このうち、第2回調査(2016年)から第4回調査(2018年)までのデータを分析に用いた。

◎詳細は下記ウェブサイト(プロジェクトの進行状況)をご覧ください。  
<http://berd.benesse.jp/special/childedu/>

## データ解説

ベネッセ教育総合研究所  
主任研究員

岡部 悟志

おかべ・さとし



本調査のほか、乳幼児とその父母を対象としたパネル調査(縦断調査)にもかかわる。中でも、子どもから大人への移行段階にある青年期の発達・成長プロセスに関心を持ち、研究を進めている。

# 2 「尊敬できる先生」と「自信がつく経験」で努力を信じるように

図3 世帯年収などの家庭背景とは無関係

●世帯年収別「努力すればたいていのことはできる」  
 ※有意差なし

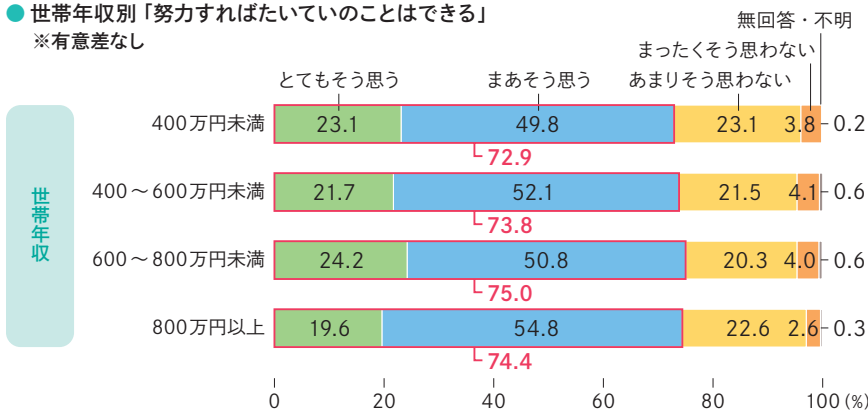
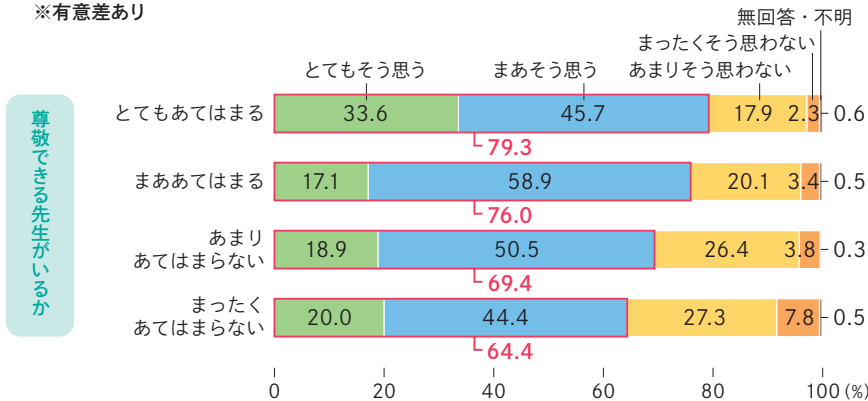


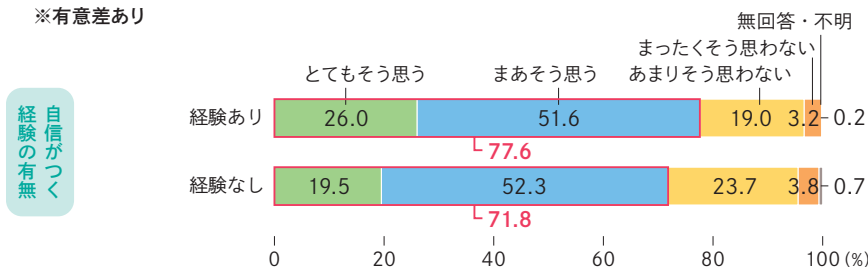
図4 「尊敬できる先生の存在」や「難しいことができて自信がつく経験」が重要

①「尊敬できる先生がいる」への回答別「努力すればたいていのことはできる」  
 ※有意差あり



注)「尊敬できる先生がいる」:「とてもあてはまる」「まああてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の中から1つを選択する設問。尊敬できる教員が存在する程度を表す。1時点前の回答を用いている。

②「難しいことができて自信がつく」経験の有無別「努力すればたいていのことはできる」  
 ※有意差あり



注)「難しいことができて自信がつく」:子どもが経験したことを複数項目から選択する設問で、「難しいことができて自信がつく」を選択した人を「経験あり」、選択しなかった人を「経験なし」とした。1時点前の回答を用いている。

努力を信じる生徒にはこういった特徴があるのか。例えば、家庭の経済面との関連性を分析したところ、世帯年収とは無関係であることが分かった(図3)。保護者の学歴別に見ても、同様の傾向だった。それらの結果は、努力を信じることができるかどうかは、家庭環境とは関連せず、別の要因があることを示唆している。

家庭環境とは別の要因として、学校要因と生徒本人要因の2つが考えられる。学校要因には、「尊敬できる先生がいる」の回答別に、その後の「努力すればたいていのことはできる」と思う割合を比較した。すると、「尊敬できる先生がいる」という生徒ほど、「努力すればたいていのことはできる」と思う比率が有意に高かった(図4①)。また、生徒本人要因では、これまで「難しいことができて自信がつく」経験をした生徒ほど、「努力すればたいていのことはできる」と思う比率が有意に高かった(図4②)。

学びに向かう意欲が湧かないのは、元々意欲が低いのではなく、自分の努力が報われて結果につながる経験が日常的に少ないことから学習してしまったという考え方(学習性無力感)がある。日々の学校生活の中に埋もれてしまっているかもしれない、学習中・学習外を問わず生徒の小さな努力を教員が認めることが、生徒に自信を持たせるきっかけとなる。また、「努力が実を結ぶ」という言葉も、尊敬できる教員から伝えられてこそ、生徒の心に響くのではないかと。

今の中学生は、これから人生100年時代を生きていく。教員が尊敬される存在として振る舞い、生徒自身が困難を克服し自信を得られる機会を増やすことで、一生学び続けるために必要な「努力を信じる」心が育まれることを願う。